

# かながわの

# 民俗芸能

第 2 号

〔題字 神奈川県民俗芸能保存協会名誉会長 津田県知事〕



## 目 次

民俗芸能保存の現段階……………飯塚友一郎(2)	県内民俗行事一覧(7月~9月)……………(8)
私の調査ノート(2)	会員のこえ
1. ぼんぼんの唄 一盆唄……………白井 永二(3)	箱根湯立獅子舞見学記……………天野 益(8)
2. 三浦三崎海南神社	国府祭の横顔……………丸山 久子(10)
船祭の資料について……………浜田 勘太(4)	団体会員紹介(2)……………(11)
つれづれなるままに……	協会口誌……………(11)
鎌倉市郷土芸能保存協会のこと……………曾我 勝治(6)	ニュース・伝言板……………(12)
民俗芸能豆辞典(2)……………川口 謙二(7)	編集後記……………(13)

神奈川県民俗芸能保存協会

# 民俗芸能保存の現段階

飯塚友一郎

民俗芸能そのものは、それぞれ何百年の伝統をつなぐものだが、これが文化財として注目され、大事にされたのは、およそ五十年前のことである。それは、つとに柳田国男、折口信夫両先覚によって日本文化の研究方法として着目されていたし、さらに古く民族学ないし民俗学の成立は、すでに今世紀のはじめからフレザーらによって企てられていた。それにしても、それほど古いことではない。

しかし、こうした民俗的現象のうちで、とりわけ歌舞演劇的な芸能に重点をおいて、その収集と記録と保存とにつとめたのは、大正末頃の「民俗芸術の会」であった。小寺融吉、永田衡吉両氏の肝入りで、その月刊機関誌「民俗芸術」は今日では貴重な文献となっている。はじめは、郷土舞踊とか民謡とか、郷土芸術とか民俗芸術とかいろいろに呼ば

れていたが、やがて民俗芸能という名称に統一されると、その対象もだんだんと明確になってきた。実は、芸術といふ芸能といつても必ずしも明確には定義づけられないのだが、これに民俗という限定をつけると、むしろかなりはっきりしてくる。それは、かつての庶民生活の中心であった祭礼を分析してみることである。ひろく神社のお祭りには、本来、祭式と饗宴と芸能との三要素が渾然たる行事をなしていなければならなかった。この祭礼芸能が、祭礼と共に永く伝承されていわゆる民俗芸能となる。

こうした民俗芸能が次第にすたれ亡びゆく傾向にあるのは否みがたない。これは社会組織の変動につれて、祭礼をこれまで支持してきたコミュニティ、つまり共同社会の土台が崩れてきたのだから当然である。誰も知るとおり、今日の民俗芸能は、

本来の姿からかなり変貌して、官民協同の助力によって人為的に保存されているという状況、これは今更言うまでもない。

しかしながら、その反面にまた、今日の情報化社会における民俗芸能が、新面目を呈して浮びあがってきたことを見のがしてはならない。それは現在の情報網の発達によって、我々は居ながらにして、全国の民俗芸能を鑑賞することができる。五十年前には思いもかけなかったことだが、我々は今日、民俗芸能の全国的なネットワークを所有し、情報化された文化財としての民俗芸能を所持している。

ここで考えなければならぬことは、すでに崩壊し、あるいは所詮宿命的に崩壊すべき伝統的コミュニティを培土としての野生の民俗芸能、これをそのまま育成することが、理論的にも実際的にも、いかに困難な仕事であるかということである。つまり、民俗芸能を野生のままに保存しようとしても、その土壌が変化しているのだから、それらの多くは所詮枯れたり変質したりするので、むしろ、これを公共的の植物園に移植

し、肥料を与えて培養することを心がける時期に来ているのではあるまいか。

それにはまず、各地の民俗芸能の実状をよく調査し、これを公共的文化財として整理しシステム化するにせまく固執し、その野生を極度に尊重する傾きがあった。けれども、少しく民俗芸能の分布をながめると、それらはおおむね根からの自生ではなく、伝播移植されたものであることが知れ、その野生はとくに失われて、旅芸人などの手が加わっているものが少なくないことが知れる。

私は民俗芸能の調査研究が、日本の伝統芸能ないしは演劇史研究のために、必要欠くべからずと信じて、現に二つの大学で民俗芸能の講座をひらいている。そして、全国から集まった数百人の学生に、それぞれのお国の民俗芸能のレポートを毎年書かせて十数年になる。これも情報化時代の一得である。

まだ、ほんとうに整理も何もできないが、まだまだ辺地には未調査、未報告の民俗芸能がいくらかもそんでいることが推測される。それ

## 私の調査ノート(一)

### 1. ほんほんの唄 — 盆唄 —

白井 永二

この習合や混淆が、あるいは民俗芸能本来の姿かも知れない。しかし全国的に視野をひろげてこれらと比較してみると、これらの整理と体系づけと洗練は困難ではあるが、あながち不可能とはいえない。一方に克明な調査記述を進めることが大いに必要なのもちろんだが、また一方にその体系化と洗練という仕事に心がけてもよい時期ではないかと思ふ。

この際注意すべきは、機能と形態との混同である。神楽、田楽、念仏、風流等々の分類は、その機能の体系であり、獅子舞、人形舞わし、俄棒踊等々の分類は、次元のちがう形態の体系である。

実はもっと具体的にのべたいのだが、それは次の機会に譲るとして、今回は、思いうかんだことを書いてみました。(二松学舎大学教授)

鎌倉市の西部深沢地区に盆行事として「ほんほんの唄」の唄を記憶している老人がいる。いわゆる盆唄と異ったものであったようであるが、

盆といえ先ずこれを口にする程若い頃に力を入れたものである。娘や若衆が十五人も二十人も前の人の肩に手をかけ、輪をつくって廻りながら、唄を掛け合い、こなしっこをした。

知り得た部落は、寺分、梶原、上町屋であるが、部落境の小川をはさんだ広場で互いに他部落の輪と争った。唄の文句にきまりはなく、からかったり、悪口を言ったり、いやがらせを唄って相手を圧倒すればよかった。梶原の唄には、

寺分の餓鬼は意地の悪い子供  
後架の廻りの 爪の皮拾って  
あっち向いちゃかじり こっち向

いちやかじり  
かじり残して 袂に入れて  
友達呼んでままごとよ ままごとよ

町屋の娘達や メリンスだすき  
梶原の姉さん達や ピロード  
町屋の姉さん達や チリメン  
よくよく見たら 茄子の皮  
梶原組から寺分、町屋の組にこな

しかける様子がわかる。  
こんな激しい悪態も盆の十六日になれば平常にもどり、争いも唄の上だけのことで決して乱暴沙汰になつたり、後にしこりは残さなかった。寺分では、藤沢市の宮の前部落と柏尾川の古館橋の所で川をはさんでやった。

ほんほん唄はなお部落続きに広がりを持っていたのである。

女が主となって男が加勢した。この日のために、女親の織った縞模様

の長袖を着て色の帯を締め、手拭を冠った。手拭はけし玉か豆しぼりの粋なものを使った。

梶原の〇〇さんは 粋なものよ  
けし玉の手拭を 肩にかけかけ  
手拭も時の流行を選び、相手に誇った風を知ることができた。晴着で唄の輪を作ったのである。

近頃流行する民謡調の盆踊に代表されるいわゆる輪踊と区分して、研究者はこのように組を作って群行し、歌を掛け合つて字境などで争うものを「盆唄」と呼んでいる。そして華やかな前者に比べて、この盆唄系統の研究も調査も進んでいないのが実情である。江戸時代に流行した小町踊や七夕踊に影響を受けたものと推定されるだけで、実証はされていない。盆行事の信仰は正月行事と対比され、複雑な要素の紛交する中で、この掛け唄を中心にした盆唄系統は重要な意味を持つ伝承だと考えらる。

丸山久子(編者注・藤沢市文化財保護委員)さんが藤沢市及びその周辺の盆唄を大変熱心に調べ、貴重な

## 2. 三浦三崎海南神社 船祭の資料について

浜田 勘太

(2)三崎誌(宝暦六年版)  
年中行事

『六月十八日 海南宮祭礼、御座船を飾り、海上に神輿を移す。磯崎町城ヶ島より船を出す。船唄を謡ふ』

(3)新編相模風土記(天保年版)  
三浦郡「海南神社」

『略』今例祭六月十八日 此日神輿を海に浮べ、御座磯に船を繋し神事を行う』

(1)(2)共に宝暦六年(一七五六)版で、著者も共に鶯丘舎草也という三崎の俳人。その遺稿をその子の松月楼市明が出版した。内容は共に三崎の神社仏閣旧記産物その他を書き、後に俳諧を添えて父の遺命をついだもの。(3)の相模風土記は周知のもの。

(1)明治十七年「城ヶ島の船」  
城ヶ島の住人星野作右衛門が写

報告をまとめておられる(藤沢市文化財調査報告第三集)。湘南の平野に広く行きわたっていたらしく、鼓太鼓とささらを楽器にしている。このささらをすてて娘らが村の家々を歩いた盆踊が、相模川の中流地域にもあった(県立博物館同地域民俗調査報告)。歌の内容から見ると足柄上郡で再興された盆踊も規を一にしており、三浦地区にも及んでいる。

この盆唄系統のぼんぼん唄が神奈川県下に広く跡を残し、一部の地区で復興されたことは誠に喜ばしい。東京、千葉、静岡などの都県にも流れをたどる事の出来るものもある。即興的な掛け合いであった点が、盆踊より伝承し難い原因であっただる運営は一層意義深いものとなる。

(鎌倉市文化財保護委員)



復活した足柄ささら踊り



三浦三崎海南神社の船祭について

は、永田先生の『神奈川県民俗芸能誌下巻』に詳細に書かれている。それにも「今はただ船唄によって古い船祭の思い出をたぐるにすぎない」とある。確かにもう二度と私達の前にその豪華な姿を見せることはあるまい。すでにその姿を見た人は物故されて物語る人もない。今にして残された資料の一部をここに留めることにする。

(1)古い地誌のもの

(1)三崎志(宝暦六年版)

年中行事「海南宮祭」  
『六月十八日 昔漁父久右衛門ト云者靈夢ヲ得、初テ祭ルトウ因テ俗ニ夢見久右衛門ト名ク、子孫今猶存ス。神輿ヲ楼船ニ移シ奉リ、掉歌ヲ発ス、花暮町城ヶ島ヨリ其役ヲナス、毎町舞台ヲ作り狂言ヲナス。』

生じた城ヶ島のお船。

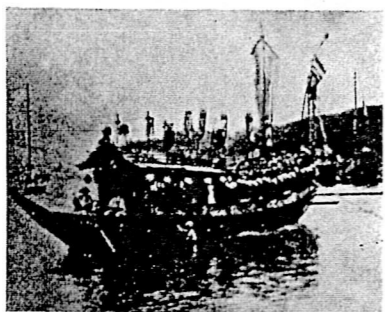
(2)年不詳「三崎のお船」

これは昭和三十年七月、三崎西の浜の三壁甚五郎翁が奉納したもので、翁は昭和三十年の頃、何処だか記憶はないが、「全国名所古跡」(?)古い本の中に神奈川県に「三崎のお船」と「箱根芦の湖」の二つがあったのでそれを写真に撮って引伸して一枚を自分の家に、一枚を海南神社の拝殿、一枚を氏子会館に奉納したもの。

(3)船唄集

(1)天保十二年夏書

城ヶ島住加藤平次郎所有のもの一冊。



三崎の御船—海南神社奉納願より—  
(年不詳)

(2)天保十二年秋書

城ヶ島石橋修由所有のもの。

(以下整理上(1)を加藤本、(2)を石橋本という)

この(2)の石橋本は永田先生が書かれているが、(1)の加藤本は本年二月に加藤金太郎氏より発見されたもの。この二冊を全部紹介することはできないので、いずれ機会をみて書くことにし、今回はその比較の一部を書いて参考とする。

▼加藤本の目次(△印は石橋本にあるもの)

- 夜宮参り哥 九頁
- △○名木松揃哥 五頁
- △○寿み田川 八頁
- △○鳴門渡り唄 五頁
- △○嘉寿里 九頁
- △○はうた 七頁
- △○振出し哥 十一頁
- ▼石橋本の目次(△印は加藤本にあるもの)
- 御神御神輿曳出し 二頁
- 花のミヤこ 四頁
- △○鳴門渡恋のうらミ 三頁
- 忍びぞろい 三頁
- △○名木松揃 五頁
- △○隅田川 四頁

○なるとふね 三頁

△○はうた 十四頁

△○振出し唄 十一頁

△○かすり 六頁

○哥まくら 四頁

後書 三頁

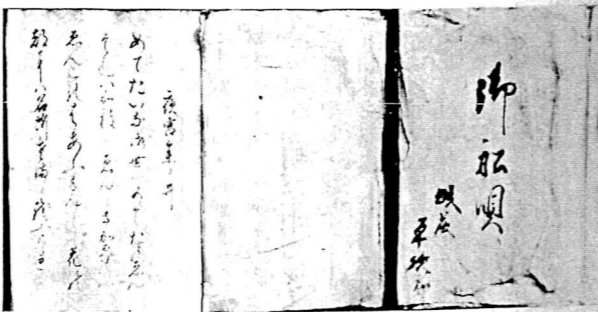
御舟詩 一頁

右のように加藤本の七に対して石橋本は十一である。筆蹟も石橋本がすぐれている。加藤家では唄之介をして伝えられている。石橋家は名主である。

◎加藤本の一部

『夜宮参り哥

めでたいな御世へめでたのゑん  
それハ加枝もゑんくさかゑのふ  
ゑんこのはあふもんく花の  
都には名所さまくおふけれど  
君に心かうかされて足に  
まかせてゆくほとに風もい  
とハぬふるやまちたとりく行  
すきて東ほのかになかむれハ  
ゑん清水寺のありかたや  
ゑんおとハのたきのひきにて  
花のかずちる其ごとくゑん  
これ沢なるちやのあのたき  
ゑんひと世の黒かミをきりく  
おしやりとゆふほんほりまんけ



お船唄—加藤本— 天保12年(1841)夏書

きおんしやふじやのかねのこゑ  
つれてきこゆるふへたいこゑん  
やあらおもしろのしをがかり  
ふりも心もよし様のはあゑん  
やあよゑんやあこのいわゑの  
さ物松ハく(略)』

◎石橋本の一部

『御船唄

御神御神輿曳出し  
めでたひなうれしめでたのさわか  
ゑだもし  
めでたひな御代へめでたのふゑん

それわか 枝もゑんく 栄へのふ  
ゑんこの葉も  
山谷間な柴の庵までやんれなつ  
みやこさよへゑんなれともノへ

此うたにて御座の磯御上り場迄う  
たのたらぬときは其時の中乗の見  
斗にてみしかきうたをあけ一はい  
にうたふへし。』

共に一節の比較だが、加藤本と石橋  
本の相違は全部を比べて結論を書く  
が、石橋本の方が整理されているよ  
うである。

いずれにしても古老達に詳しくたづ  
ねて調べてみたい。  
終りに両書の体裁を書こう。

#### ▼加藤本

和紙袋綴二十七葉、筆写本

表題はないが、二葉目に「御船唄」  
とあり左下に「加藤平次郎」とあるが  
これは後に書かれたものであろう。  
最後の所に

「天保十二丑夏書之」とある。これ  
は全文と同じ筆蹟であるが、末尾に  
「加藤平次郎」とあるは前述のとお  
り後に書いたものであろう。

虫喰いはないが、保存はよくない。  
四つに折って布製の袋に蔵していた  
ので、表裏表紙は殆ど切れている。

#### ▼石橋本

美濃袋綴三十四葉 筆写本

表題はないが、最初に「御船唄」と  
ある。

末尾の由来書の終りに  
(前文略)

『昔より只心覚へ而已にて伝りけれ  
ば少しの誤りハしれとも本より予も  
知らざる事なれと絶て文句の分らさ  
る所も有やうに見ゆれば猶此うへの  
誤あらん事を愁て天保十二辛丑年の  
秋細に老人に尋問て一小冊につり  
て永く当所の若者仲間へ送りぬ後に  
閉て笑給へとしかいふ。』

#### 城ヶ島

石橋脩由書

『御印』

によってこの編集の意図を知り、併  
せて作年の天保十二年(一、八四二)  
秋を知ることが出来る。

なお最後に「御舟詩」の七言絶句が  
あるが、これは永田先生のいわれる  
後になって書き添えたものである  
う。虫喰により読めない箇所二、三  
の程度であるが文意を知ることがで  
きる。現在も若者仲間が之れを保存  
している。未整理をお詫びする。  
(三浦市文化財保護委員)

鎌倉市郷土芸能保存協会のこと

#### 曾我勝治

鎌倉市は奈良、京都などと共にか  
つてある時期に政治の中心であった  
所です。昭和四十五年現在、鎌倉に  
ある有形指定文化財の数は三百数余  
件をかぞえており、現在も計画的に  
その保護を行なっています。

一方、無形文化財と言われる民族  
の伝統的芸能は録音機、写真等によ  
りその記録を作るにとどめ、それを  
後世に伝えようとしておりました。  
ところが昨年、鎌倉市市制施行三  
十周年を記念して行なわれた行事の  
一環として「鎌倉郷土芸能大会」を  
開催したところ、「私の村に伝わる  
唄、踊りを絶えさせない様に……」  
と「だまっていたら囃子は絶える。」と  
いった反響を起し「どうかかしくな  
くしては」という熱心な動向が見られ  
た。そうした盛り上った空気は、今  
年二月さっそく「鎌倉市郷土芸能保  
存協会」を結成させ、積極的に組織  
だつて、その保護育成を行なうこと  
になりました。

現在加盟団体は、八雲神社——鎌  
倉神楽・大船——やき米つき唄・材  
木座——あやめ踊り・坂ノ下——面  
掛行列・小袋谷——はやし獅子・御  
霊神社——鎌倉神楽・津村——餅つ  
き唄・材木座——鎌倉ばやし・腰  
越——歌題目・大船——鎌倉ばやし  
・材木座——天王唄・鳶職組合——  
木やり唄・光明寺——声明・大町——  
鎌倉ばやし・建長寺——御詠歌の  
十五団体を数え、会員は百数十名を  
越えました。

そして本年度の計画として、特に  
若い後継者の育成ということに主眼  
を置き、今秋には研究発表会を開く  
こととなり、出演予定団体は、やき  
米つき唄、はやし獅子、あやめ踊り、

#### 民俗芸能豆辞典 (一)

#### 川口謙治

#### 2 雨乞いの竜頭と幡頭

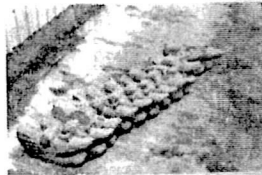
雨乞い行事には蛇・竜に関する像  
や面が用いられる場合が多い。

蛇は水辺など湿地帯に棲息し、昔  
の人々は蛇が長じて大蛇となり、大  
蛇がさらに竜となり、神通力を得て  
天に登ると考えていた。早天つづき  
は、農作物を枯らしてしまい、農民  
は早魘を恐れ、そんな時には雨乞い  
をして慈雨を待った。水辺にいる竜  
蛇は雨をもたらす神様でもある。

県下にも竜像や竜頭と伝えられ  
る神体を使い、また藁などで蛇体・  
竜体を作って雨乞い行事を行なうと  
ころは沢山あった。かつては各村々  
にあったといっても過言ではなから  
う。その一、二の例を紹介する。

(1)横浜市港北区師岡町・熊野神社  
には、十三個の木製の竜頭がある  
。一個一個形も違い風損の具合か  
らみても大早魘毎に作られたものだ  
らう。この竜頭に棒をつけ、それを  
社前の「いの字池」に立て村の男子

熊野神社の竜頭



宗賢院の竜頭骨



が口々に雨乞いの呪言を唱え、池の  
周りをたどって竜頭に水をかけて雨  
乞いするものである。

(2)藤沢市大庭・宗賢院には昭和六  
年頃、太古のものではないかと騒が  
れた竜頭骨と伝えられるものがある。  
全長六十五cm、高さ二十六cm、

アゴの長さ四十cmの大きさで、生物  
学者の説ではイルカの類の頭骨では  
ないかという。壇家の三猪家から寄  
進されたもので、早魘の折、寺から  
この竜頭骨を持ち出し、附近の小川  
でこれに水を注ぎ雨乞いをしたもの  
である。我々が歩く神社、寺で時折  
蛇骨堂を祀るものにぶつかるが、そ  
の社寺での蛇骨堂に関するいろいろ  
な伝説を聞く。それはそれとして、  
蛇骨堂はやはり雨乞いや慈雨を願う

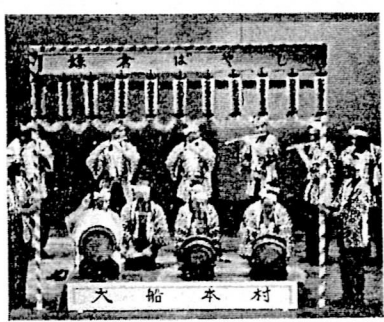
農民の神であった。

(3)伊勢原町下粕屋・高野屋神社に  
ある陵王面は、雨乞面として特に注  
文して製作したものとと思われる。こ  
の陵王面は舞楽面と違い、竜首がな  
く二本の角がある。実際は、神社の  
裏手にある涌泉の水を汲んで陵王面  
にかけ、その面を神主が顔につけて  
社殿の前庭に浄水を撒く方法で、昭  
和初期にやったのが最後である。

(4)幡や幟を伝える社寺も多いが、  
幡幟は布のため廃棄されたが、これ  
らに竿につるした時の竿の先の幡頭  
のみが多く残されている。この幡頭  
も竜頭形をしたものが多い。これも  
慈雨を願う農民の祈りの象徴といえ  
よう。



高部屋神社の陵王面



鎌倉ばやし

(鎌倉市教育委員会職員)



### 箱根湯立獅子舞見学記

天野 益

箱根湯立の獅子舞は、昨年協会が発足したとき映画で見せてもらっていたので、見学会には是非参加したいと思っていました。

当日三月二十七日は、春とはいえまだ箱根や丹沢には雪があって、風が冷たく肌寒い日であった。八時四十五分藤沢駅集合で、県北の津久井からだと一寸つらかったが、遅れてはと気込んだためか、八時ちょっと過ぎには着いてしまった。

親友の杉崎さんと並んでバスは中程に席をとったが、前も後も知らない人ばかり。でも、民俗芸能を見て心洗いたい気持は一つで、その点気おける同志だと思ふ。なにをしなればならないという事がないことしたバス旅行ってなんていいものだろう。窓外をせわしげに行き交う人達より、今日は自分達の方がよほ

どゆとりがありそうに思えて、心はウキウキとはずむのである。

車はやがて小田原に着く。ここで今日の講師である永田先生が乗車される。これから道は湯本の箱根新道を通って箱根へとぼるのである。が、宗匠頭巾をかむって、一見茶人のような先生の、箱根旧街道のこと、石仏のこと、芦の湖のことなど懇切な説明に、みなかたづをのんで聞き入るのであった。人徳というのだから、先生のそばにいるとあたりが和んで春風駉蕩である。

小田原の海岸あたりは、道端の木々も芽吹いていたが、箱根にきてみるとまだつぼみもかたい。それどころかところどころに雪があると感心しながら巨杉うっそうとした箱根神社に着いた。このお宮には幾度も来ているが、湯釜のこと、万巻上人の

像など、その由って来たところを聞いて今更遠い先人と思ふ。

ここで各自携行の食事をし、一時三十分、仙石原の公民館に着いた。ここでは、木質温泉つたや旅館主沢田秀三郎さんの好意で、同氏秘蔵の箱根絵巻が拝見できた。流麗でせん細なこの絵巻は、今から凡そ百五十年前沢田家何代目かの先祖の作と伝えられ、黙々としてこれを展示してくれる沢田さんは、ひげの中に顔があるような人であった。

そこへ町の住民課長さんが獅子舞へ案内すると見えた。車のはげしい停留所付近を山手へのぼる細道が諏訪神社の入口で、金魚屋だの、オデノ屋だの、オモチャ屋だのがささやかな出店を並べている。

県道から三百メートル位で突き当たりと胸を突くような石段、その上が古びた社屋、石段の手前左側が青い藻で底のわからぬような池である。獅子舞保存会の方が笑顔で迎えて入れてくれる。だが、我々のために席をとってくれたには全く恐縮した。

獅子舞は一段階がすんでこれから本番に入るという。池の前に大きな

釜がすえられ盛んに火がたかれていた。社前正面石段下で行なわれてい

る手舞に、先生が舞手の足運びを見

よという。あれには七五三のリズム

があるようだ。

やがて誰かが「これからが大変だ

よ」とささやいた。煮えたぎった湯

釜の前で笛、うたをつとめた白衣の

若者の一団がいつかなくなつたと

思つたら、突然、下帯一つとなつて

石段をかけ下りてくる。単調な舞に

あきた見物の意表をつく素晴らしい演

出である。春とは名のみ、まだ寒風

肌をさす箱根の仙石原で素っ裸とは

驚いた。若者の見事な裸体、ふだん

裸にならない人の肌が、恥ぢらしいを

含んでピチピチとはづんでい



獅子舞が始まるのを待つ会員

な、頭髪を整え、髻をそつてここに臨んだのである。生れたままの姿で急な石段をかける若者の姿こそ見る者にこの上ない生の喜びを与えるのだ。

先生がこの行事は成人を祝う元服

の祭りであるといつたが、ここに会

する者の半分は女性のようにだ。裸の

人の若妻は、自分の肌を見られるよ

うに顔をそむけているだろうか。老

いた女性がかつての性を思い、里の

娘は見るような見ないようなふりを

して、実は強烈な刺激にしぶれてい

るのかも知れない。

この水を浴びるとその年風邪を引かぬともいわれるのだろうか。潔斎して神前に舞を納め、神の心を鎮めて五穀豊穡、家内安全、子孫繁栄を祈る祭りの形がこれで終るのだろうか。熱湯に浸した笹もふりかかる時は温水で、人間が月に飛ぶ科学万能時代には凡そ割りきれないが、先生はこうした民俗行事の心のふるさとがあつて、我々があくまでこうした民俗行事を残さなければならぬと結ばれる。

舞が終つて釜が倒され、その湯で火を消すと白衣の若者達が無事終了を抱き合う様にして喜んでい

### 県内民俗行事一覽

(七月、九月)

7月7日 平塚の七夕祭

平塚市内 (22)一七〇〇

10日 八坂神社のハヤシ獅子舞

大磯町西小磯 (6)一一四六

第2日 福田神社のハヤシ獅子舞

大和市福田 (67)一九九三

12日 毘沙門・大乘の獅子舞

三浦市毘沙門 (88)七五八

12日 雷神社のハヤシ獅子舞

横須賀市追浜本町 (65)二三八五

14日 八坂神社祭(天王祭)

藤沢市江の島 (22)四二二四

14日 黒船祭

横須賀市久里浜 (22)四〇〇〇

14日 八坂神社のお礼まき踊

横濱市戸塚区戸塚町(22)八〇六五

14・15日 大美和神社の鹿島踊

小田原市江の浦 (20)三六五

15日 茅ヶ崎海岸降祭

茅ヶ崎南海岸 (62)八二〇〇

15日 八幡宮の祇園舟

横濱市金沢区富岡町(22)七三九三

15日 諏訪神社の湯立獅子舞

箱根町宮城野 (2)二二三五

15日 走水神社の船祭

横須賀市走水 (41)四一一三

15日 八幡神社の船祭・湯花神楽

横須賀市鴨居 (41)五三〇〇

中旬 瀬戸神社の湯花神楽

横濱市金沢区六浦町(22)九九九二

18日 海南神社の行道獅子

三浦市三崎町海南 (81)三〇三八

18日 高来神社の船祭

大磯町高麗 (6)一一四六

20日 諏訪神社の獅子舞

愛川町三増 (81)四六六

20日 白幡八幡神社の弥宜舞

川崎市平 (81)五六三九

22日 八坂神社のハヤシ獅子舞

三浦市南下浦町金田 (88)七五八

25日 御霊神社の御供流し

鎌倉市坂の下 (22)三二五一

27・28日 貴船神社の船祭・鹿島踊

真鶴町真鶴 (68)〇〇六六

31日 湖上祭(竜神祭)

箱根町芦の湖 (3)六〇三一

31日 寒田神社の大名行列

松田町惣領 (82)〇五七三

8月1日 素戔神社の鹿島踊

湯河原町吉浜 (二九)二二三

3日 諏訪神社のハヤシ獅子舞

津久井町青山 (64)一三九九

7日 大磯の七夕祭

大磯町東小磯 (6)〇九一〇

# 国府祭の横顔

丸山 久子

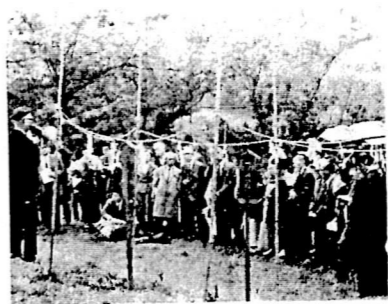
五月五日、端午の節供、子供の日、降らず照らず、緑はういういしく空気がおいしく、若葉の匂いと鳥の声という恵まれた一日、私たちはこのまちを見た。見学と云うべきであったが、毎日を時刻でござまれていたような生活から徹底的に解放されて、お祭りの群衆の中を、ただ快く、うっとり楽しんで歩きまわったと云う方が、私などの場合適当かもしれない。

県の無形民俗資料に選択されているこのお祭りを、文字だけでなく一度は実際に見たいと思っただけが、思いがけない機会に恵まれ、民俗芸能保存協会の方々とバスで神揃山に向う。化粧塚と呼ばれる小高い岡の中腹の芝生の中に降臨石があり、田先生の解説によって、この石の位置は古記録に見えるものと全く異なっていないことを知った。一宮以下順々に神輿が到着される。だんだん

と盛り上って来る祭りの興奮を感じながら坐って見ていると、向うの方で何かどよめきが始まった。川句神社のチマキ行事である。俵の中につめた小さな餅が撒かれ、それを拾おうとする人々のどよめきであった。五ミリ角で一センチぐらいの長さの白い切餅で、私の足許にもとんで来た。

正午、「座問答」がはじまる。前後約三十分、無言のうちにすすめられて「いづれ明年まで」という一声で終るこの神事を見てみると、言葉に云いあわせない感動がわいてくる。まちなまつりには、謹んで神の来臨を待ち、迎えて欲待し申すことだときいている。年に一回のこの日、

神人ともに喜び楽しむ日であることもきいている。私もいつか文化財の見学者であることを忘れ、楽しい気分になって行く。神揃山から六所明神に向うみち、屋台店の風車や風船、おでんや焼きいかの匂いが気になり、木をくりぬいたこねばちや、蝋桶がほしくなり、長髪に派手なシャツを着て胸をあけた若者の表情に興味を覚え、老婆につれられた子供の持つ綿あめに心をひかれる。みんな



神揃山で永田先生の解説を聞く会員

が体中の節々をのぼし、皮膚をのぼしたような感じで、初夏の陽の中をぞろぞろと、ゆっくり歩いて行く。毎日、腕時計とにらめっこをしながら、ラッシュの電車にもまれて遠くへ通勤している人も沢山居るであろうが、今日ばかりはそんな表情はどこにも感じられない。祭りの形は昔から幾らかつづの変遷はあったろうが、この心持ちばかりはもとのままではないだろうか。よい見学者とは云えなかったかもしれない私も、祭りの心持ちをじかに経験したことに満足して、お土産のかやの葉につつんだ粽を持って帰りのバスに乗りこんだ。

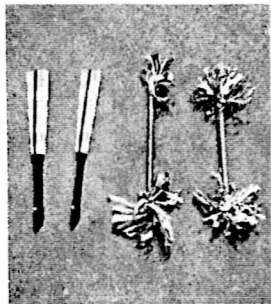
(藤沢市文化財保護委員)

## 団体会員紹介 (一)

### 3 チャッキラコ保存会

チャッキラコは、漁港三崎の花巻・仲崎地区に保存されている歌舞で七・八才から十二・三才までの少女が十〜二十人くらいで舞踊し、老嫗や中年の主婦たちが十人くらいで歌う。楽器はない。

その史証として宝暦六年(一七五六)出版の木村草也遺稿「三崎志」がある。年中行事の左義長の項の次に「初瀬踊一名日ヤリ、十五日女児集り踊ル」とある。いまは「チャッキラコ」という。チャッキラコとは二本の綾竹を打ち合わせる音から生れた名で、それが踊りの総称となっている。踊りはハツイセ・二本踊・鎌倉節・チャッキラコ・よさざ節・お伊勢参りの六種である。衣裳は正月の晴れ着が本来の姿であるが、現在は千早に朱の袴、金色の立烏帽子に花かんざしを着用していることが多い。六種の踊りの持物は、チャッキラコのコキリコ(綾竹)、二本踊の二本の扇、ほかはすべて扇一本だけである。踊りの形態は、お伊勢参りだけ円舞でほかはすべて二列に並んで向いあって踊る。歌詞の中には



コキリコ(右側)と扇

(表紙写真参照)

中世にさかのぼる古謡がある。簡潔な踊り方はよく少女の清純さと調和し、全国的に類例の乏しい民俗芸能である。一月十五日午前十時から本宮様、海南神社その他町内有志の家々で踊る。現在会員数は、音頭取り九人、踊り子十二人、その他仲崎・花巻区の区役員及び有志とチャッキラコに関心をもつ市内の有志七十八名である。市民はチャッキラコの保存に強い情熱と誇りをもっている。会長は宮口若太郎氏(三浦市三崎二一三一二)である。なお、チャッキラコは昭和四十年五月十四日に県無形文化財に指定され、本年六月八日には国無形文化財に選択された。これからの発展が期待される。

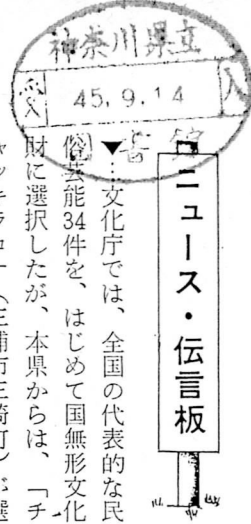
## 協 会 日 誌

- 44年7月14日 神奈川県民俗芸能保存協会設立総会を横浜市中区・勤労会館で開催。出席者95名。
- 9月10日 芸能大会に関する常任理事会を相模原市民会館で開催。
- 10月29日 第6回県民俗芸能大会を相模原市民会館で開催。出演団体15。観客約800名。
- 11月24日 常任理事会を県庁で開催。民俗芸能鑑賞会等について審議。
- 12月10日 会報の創刊号を発刊。同時に会員証と会員名簿を発行。
- 12月14日 映画鑑賞会を伊勢原町公民館で開催。参会者約50名。
- 45年1月18日 民俗芸能「にわか」を国立劇場で鑑賞。参加者27名。
- 3月24日 理事会を県庁で開催。45年度事業計画等について審議。
- 3月27日 「湯立獅子舞」(箱根町仙石原)を見学。参加者29名。
- 4月22日 総会及び理事会を横浜市中区・農業会館で開催。45年度事業計画・予算等を可決承認。
- 5月5日 「国府祭」(大磯町国府本郷)を見学。参加者68名。
- 6月15日 映画鑑賞会を橋町前川・福祉会館で開催。参会者約90名。

- 第1又は第2日 お馬流し
- 横浜市中区本牧町 07七六一
- 14・15日 弘法山の百八松明
- 秦野市弘法山 01五一一
- 第2日 八幡神社の獅子舞
- 川崎市小向 01三四〇八
- 15日 八幡神社の雅楽
- 平塚市浅間町 01〇一二四
- 16日 大文字焼
- 箱根町宮城野明星岳(5)七一一
- 16日 お精霊流し
- 三浦市三戸 01二一四一
- 17日 皇太神宮の人形山車・湯花
- 神楽 藤沢市鶴沼 02九九〇〇
- 21日 森山神社の世計神事・湯花
- 神楽 葉山町一色 05〇四一八
- 22日 諏訪神社の獅子舞
- 津久井町鳥屋 (鳥屋)三七
- 26日 御嶽神社の獅子舞
- 相模原市下九沢 02一三六九
- 27日 諏訪神社の獅子舞
- 相模原市大島 02九二五六
- 28日 阿夫利神社の倭舞・巫子舞
- 伊勢原町大山 05二〇二二
- 9月3日 栗原神社のハヤシ獅子舞
- 座間町栗原 01〇八八五
- 11・13日 竜口寺の御会式
- 藤沢市片瀬 02四三一六
- 12日 葉師堂の獅子舞
- 川崎市菅 01七一九八
- 15日 八乙女舞(鶴岡八幡宮)
- 鎌倉市雪ノ下 02〇三一一
- 16日 鶴岡八幡宮の流鏝馬
- 17日 御霊神社の湯花神楽
- 鎌倉市梶原
- 17日 熊野神社の湯花神楽
- 横浜市金沢区朝比奈
- 18日 御霊神社の面掛行列・湯花
- 神楽 鎌倉市坂の下 02三二五一
- 18日 若宮神社の湯花神楽
- 三浦市初声下宮田 08〇七五八
- 19日 寒川神社の流鏝馬
- 寒川町宮山 05〇〇〇四
- 12日 高石神明社祭
- 川崎市百合丘 06三〇五七
- 24日 熊野神社の湯花神楽
- 鎌倉市大船宮前
- 25日 北野神社の湯花神楽
- 鎌倉市山崎 02三二五一
- 25日 八幡宮の湯花神楽
- 横浜市金沢区富岡町7三九三

◎：現地に行く際は、事前に実施するかどうか確認して下さい。(電話は、所在地の下の数字です。)

◎：10月から12月までの民俗行事は次号に掲載します。



# ニュース・伝言板

▼文化庁では、全国の代表的な民俗芸能34件を、はじめて国無形文化財に選択したが、本県からは、「チャッキラコ」(三浦市三崎町)が選ばれた。心からお祝いするとともに今後の発展をお祈りします。

▼横浜市金沢区六浦町六浦三〇〇九の九五、中野郁太郎(芸名・菅野序柳)氏は、「一中節」の唄い手として同様選択された。

▼鎌倉市教育委員会は、鎌倉市内の民俗芸能を保護育成するため、別掲のとおり本年2月2日に「鎌倉市郷土芸能保存協会」を設立した。詳細は市社会教育課へどうぞ。

▼7月29日、東京有楽町の東京宝塚劇場で日本演劇協会主催の民俗芸能だけの「演劇祭」が開催される。本県からは「あめや踊」(三浦市南下浦町菊名)が出演の予定。

▼8月21日(金)栃木県宇都宮市において、関東甲信越静岡の民俗芸能を一堂に集めて公開する「第12回関東ブロック民俗芸能大会」が催されるが、本県からは「相模人形芝居」

「下中座」(橘町小竹)が出演する。▼県教育委員会で、県指定無形文化財の記録映画を42年から作成しているが今年は「虎踊」(横須賀市西浦賀町)と「チャッキラコ」(三浦市三崎町)を撮影する。

▼「第7回神奈川県民俗芸能大会」は、10月4日(日)小田原市民会館で開催される。出演芸能は次のとおり。

- 第一部
- 1 寿獅子舞 小田原市
  - 2 神代神楽「天孫降臨」 横浜市
  - 3 神奈川の民謡
    - (1)三崎甚句・ダンチョネ節 三浦市
    - (2)野毛山節 横浜市
    - (3)箱根馬子唄・長持唄 箱根町
  - 4 鳥屋の獅子舞 津久井町
  - 5 鹿島踊り 湯河原町
- 第二部
- 1 小田原囃子 小田原市
  - 2 百万遍念仏付獅子舞 山北町
  - 3 民謡仕事唄集
    - (1)酒造り唄 小田原地方
    - (2)鎌倉の田植唄 鎌倉市
    - (3)網引き唄 小田原市
    - (4)大磯の麦打唄 大磯町

- 4 足柄ささら踊り 南足柄町
  - 5 人形芝居「先代萩」 厚木市
- ▼協会の主な事業計画は次のとおり。詳細は後日連絡します。
- 8月下旬 民俗芸能鑑賞会「日本の民謡」 於・国立劇場
- 10月4日 第7回神奈川県民俗芸能大会 於・小田原市民会館
- 11月15日 「一スリ火」見学会 於・相模原市当麻、無量光寺
- 12月 会報「民俗芸能大会特集号」発行

◎映画鑑賞会は秋に開催予定。

◎なお、民俗芸能の調査研究として県内の民謡を録音採取します。みなさんのご協力をお願いします。

## 新規会員募集

民俗芸能を実際に行なっている人、また民俗芸能に興味をおもちの人等多くの方々の入会をお待ちしております。事業内容は右記のとおりです。入会ご希望の方は氏名、住所、職業、電話番号を明記の上、会費(年額一口個人五百円、団体千円)を添えて協会事務局あてご送付下さい。

## 編集後記

☆このたび、飯塚友一郎氏(協合理事)より寄せられた巻頭の一文は今後の民俗芸能保護の方向を示唆するものであり、特に民俗芸能の学問的体系化は、緊急になされなければならない問題の一つといえよう。

その意味では今回、文化庁が民俗芸能を28種に分類し、国無形文化財の選択を実施したことは、いろいろな問題点を含むとはいえ民俗芸能にとって画期的なことであり、今後の保護行政に大いなる前進が約束されたものと考ええる。

☆協会は7月で満1才を迎えました。基礎固めの過去1年でしたが、これからの一層の充実と発展を期するために、会員諸氏の忌憚のないご意見、ご感想をお寄せ下さい。(文責 小野)

## 「かながわの民俗芸能」第二号

昭和45年7月25日発行  
横浜市中区日本大通り一  
神奈川県教育庁文化財保護課内  
編集 神奈川県民俗芸能保存協会  
事務局 Tel. 041-111-1111  
発行 神奈川県民俗芸能保存協会  
印刷 株式会社 中島印刷所  
Tel. 041-0644-6